

武蔵野日曜集会 復活節

復活の生命

——ルカ伝第24章——

1961年4月2日

復活という喜びの節 十字架受難と復活 生ける者 イエス自ら近づきて共に往き給う 如何なる事ぞ エホバの僕 キリストの十字架道 殺人は殺神に極まる 甦えらざるをえない 枯骨の復活 大和の福音の使命 贖いの道 再臨節 イエス見えずなり給う イエスその中に立ち 平安なんじらに在れ 十字架における御霊のパプテスマ

【ルカ24】

1 一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。² 然るに石の既に墓より転ばし除けあるを見、³ 内に入りたるに、主イエスの屍体^{しかばね}を見ず、⁴ これが為に狼狽^{うろた}えおりしに、視よ、輝ける衣を著^きたる二人の人その傍らに立てり。⁵ 女たち懼れて面を地に伏せたれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。⁶ 彼は此処に在^{いま}さず、甦^{よみが}えり給えり。尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶^{おも}い出でよ。⁷ 即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付^{わた}され、十字架につけられ、かつ三日めに甦^{よみが}えるべし」と言い給えり』⁸ ここに彼らその御言を憶い出で、⁹ 墓より帰りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。¹⁰ この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。¹¹ 使徒たちは其の言を妄語^{たわごと}と思ひて信ぜず。¹² 「ペテロは起^たちて墓に走りゆき、屈^{かが}みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ帰れり」

¹³ 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、¹⁴ 凡て有りし事どもを互に語りあう。¹⁵ 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。¹⁶ さて彼らの目遮^さえられて、イエスたるを認むること能^{あた}わず。¹⁷ イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状^{さま}にて立ち止^{とど}まり、¹⁸ その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓^{やど}り居て、独^{ひと}り此の頃かしこに起りし事どもを知らぬか』¹⁹ イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業^{わざ}にも言^{ことば}にも能力^{ちから}ある預言者なりしに、²⁰ 祭司長ら及び我が司^{つかさ}らは、死罪に定め



んとて之を付し遂に十字架につけたり。²¹我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日はや三日めなるが、²²なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝風墓に往きたるに、²³屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。²⁴我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき²⁵イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。²⁶キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』²⁷かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。²⁸遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、²⁹強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。³⁰共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、³¹彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えなくなり給う。³²かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』³³かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』³⁷と云い給う。『なんじ懼れて、見る所のものを霊ならんと思ひしに、³⁸イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰「斯く言いて手と足を示し給う」⁴¹かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

⁴⁴また言い給う『これらの事は我が汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』⁴⁵ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、⁴⁶『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、⁴⁷且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。⁴⁸汝らは此等のことの証人なり。⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留れ』

⁵⁰遂にイエス彼らをベタニヤに連れゆき、手を挙げて之を祝したもう。⁵¹祝



する間に、彼らを離れ「天に挙げられ」給う。⁵²彼ら「之を拝し」大なる歓喜をもてエルサレムに帰り、⁵³常に宮に在りて、神を讃めいたり。

●復活という喜びの節

4月2日の復活節というのは、私が最初に内村鑑三先生のところの大手町の集会で迎えた1923年の春の復活節が多分、4月2日と私は記憶しておりますが。その時にこの「るわしの白百合」を女の方だけに先生は歌わしていましたが、そういった思い出もありますものですから、今日は女の方だけに歌っていただいた。また、先生の20周年記念のときも、私は司会者として壇上に立ちましたが、その時にも同じようにやったことを覚えています。今日は、ルカ伝の24章をお開き願います。キリスト教には三つの大きな祭の日がある。降誕節、復活節、そして聖霊降臨節。ドイツでは、3月、4月の二か月のお休みのことを、「復活節休暇」（オーステル フェーリエン）という。復活節休暇が二か月あるんですから、うらやましい。それくらい、この復活というのは――聖霊降臨節にもちよつと休みがあるらしいし、クリスマスも休みがありますけれども、とてもこの「復活節休み」という名前を持った春休みにはかなわないくらいに――復活というのはあちらでは喜びの節としているようです。もうひとつ本当は、

「再臨節」

というのがあったっていい。それはどこにもないけれども。再臨を待ち望むところの、そういう節があつてもいいと私は思いますが。あるいは作つてもいいけれども。

●十字架受難と復活

復活の記事は、もちろんその前の十字架受難の金曜日、ルカ伝23章の50節あたりから、

「⁵⁰議員にし善かつ義なるヨセフという人あり。⁵¹――この人はかの評議と仕業とに与せざりき

その十字架に係わる「評議と仕業とに」ですね、

――ユダヤの町なるアリマタヤの者にて、神の国を待ちのぞめり。⁵²此の人ピラトの許にゆき、イエスの屍体を乞い、⁵³これを取りおろし亜麻布にて包み、⁵⁴巖に鑿りたる、未だ人を葬りし事なき墓に納めたり。⁵⁴この日は準備日なり、かつ安息日近づきぬ。⁵⁵ガリラヤよりイエスと共に来りし女たち後に従い、その墓と屍体の納められたる様とを見、⁵⁶帰りて香料と香油とを備う。

かくて誠命に遵いて、安息日を休みたり。」

ユダヤの安息日は土曜日にあたるわけですが、それからその明けるのを待っていた。

1 一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく
これはガリラヤからずつとついて来た女の人たちです。



2 然るに石の既に墓より転ばし除けあるを見、3 内に入りたるに、主イエスの屍体を見ず、4 これが為に狼狽えおりに、視よ、輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。5 女たち懼れて面を地に伏せれば、その二人の者いふ『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。6 彼は此処に在さず、甦えり給えり。尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶い出でよ。7 即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日めに甦えるべし」と言い給えり』

そう仰つたじゃないかと。この「甦えるべし」の「べし」は非常に強い「べし」でありまして、

「どうしてもこれは甦らなければいけないかたである」

という、ギリシア語の強い「べし」という字です。「狼狽えた」とか、「懼れた」とか、「面を地に伏せた」とか、あるがままに書いてある。

この復活というようなことが――パリサイ人は復活をそれでも信じてはいましたけれども――いかにキリストの復活というものに対しては、みんなが本当にこれを予め信ずることができなかったか。女たちもそうであるし、弟子たちも初めのうちは、女たちの報道を本当にしない。キリストの甦りということは、彼らにとっては、思いもよらなかったことであつたわけです。

「よみがえり」という日本語は、「よみからかえってくる」ので、

「主（キリスト）は陰府にくだり」

と使徒信經にありますように、陰府から返ってくる。まあその事態がどうであるこうであるは、今はしばらくおきまして、事実そういうわけだと。

8 ここに彼らその御言を憶い出で、墓より帰りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。

他の福音書との異動のことは、今日はそういう比較研究はやめにいたします。

10 この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブ

これは十二使徒の一人です。

の母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。11 使徒たちは其の言を妄語と思ひて信ぜず。12 「ペテロは起ちて墓に走りゆき、屈みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ帰れり」

これも「怪しみつつ」で、喜びもしない。

「変だな、おかしいな。誰か盗んだのじゃないかな」

くらいのことを思ったかもしれない。まあそんな始末です。

●生ける者

けれども、霊的な使い、天使が言つた言葉は非常に大事な言葉です。



「なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか」

「生ける者」と言いましたが、キリストはもう、イエスはずっと前から本当の活者です、活ける者です。普段、キリストの生き方は、我々がこうやって鼻から息を吸っている生き方とは違って、本当にキリストは「生ける者」です。死に打ち勝たれるような生き方をしていない。死に打ち勝つ生き方をしている。普段の生き方が、死に打ち勝つ生き方をしている人でなければ、復活はできない。

私たちは残念ながら、現実の我らというものは死に打ち勝つ生き方を持っていない。しかし、キリストは、イエスはどのような事態が来ようが、すべてのものを突破する生き方を持っている。それが本当に「生きている」ということです。

私たちにおいても、非常に元気な人、非常に快活な人、その人に会えば何かしらんけれども明るくされるような人、そういった人が忽然として亡くなったような場合に、どうしてもその人が死んでいるとは思えない。またそこからちよつと現れて来はしないかと。あの笑顔をもつて現れて、みんなを喜ばせ笑わせしはしないか、といったような感じをしばらく持つものです。

そういったようなよりも、質的にもつと本来的な意味において、キリストは「生ける者」です。そのキリストの生きのよさというものを、そのキリストの生命というものを、弟子たちもあんなに一緒にいながら、あの素晴らしい言葉を聞き、あの素晴らしいわざを見ていながら、

「この人は普通の人とはちがう。そうか、それはもう当たり前だ、そのように甦って、墓に見えないのは」

と言って然るべきはずのところ、弟子たちは、また女たちもすべてのそういったご連中は、肉においてキリストを知っていたが、肉におけるキリストの中を見ていない。

現実はこの肉において知っていていいんですよ、人は。けれども、ただ肉において知っているだけだから困る。

「その中に何が隠されているか」

を見ていないから。その意味において、弟子たちもみんな、受肉しているところの本当の受肉が分かっている。ただ普通の人間だと思っている。イエスは「ロゴス・キリストの受肉体」です。肉を受けて受肉体であるところのキリストというものをイエスにおいて見えていないから、その生きが分からない。この核が、生きが、その生命が分からないから、みんなこうやってうろたえたり、悲しんだり、疑ったり、戸惑ったりするわけです。

これは、私たちもそこに居合わせたら、同じことであるにちがいない。人間は、本来みな「神の子」でありながら——みなさんはみんな神の子です、牢屋にいる人でもみんな神の子です——その神の子の本質を失っている。

「失われたる存在」



というのはそのことです。失われていなければ、このキリストの生きが見えるわけです。それが見えないということが、お互いの情けなさです。福音書は正直に、ペテロやなんかのうろたえぶりも、いぶかりぶりも、疑いぶりも書いてある。

●イエス自ら近づきて共に往き給う

¹³ 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、¹⁴ 凡て有りし事どもを互に語りあう。¹⁵ 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。

「イエス自ら近づきて共に往き給う」

という。私たちは時々、寂しかったりなんかしている。見えざるキリストが自分から、私たちの知らざるにかかわらず、自ら近づいて私たちに来たもう。いつも私たちに近づいて来られる。あちらから。こっちから神さまの方に近づくのはなかなか難しいけれども、キリストの方から近づいて来てくださる。ただ、肩をうつて、

「おい、きみ」

てな具合になかなか仰らない。近づいているけれども、無理強いはなさらない。

「私は近くにいるんだよ、気がつかないかね」

というわけです。

¹⁶ さて彼らの目遮えられて、

「目」というのはもちろん「心眼」、心の眼です。もちろん、この場合には肉眼も遮られていますけれども。見えない。

イエスたるを認むること能わず。

肉の眼にはイエスが見えない。しかし、今度は近づいて来られた。本当に近づいて来られたからね、この時は。

¹⁷ イエス彼らに言い給う

というので、「なんか旅人が来たな。知らない人が来たな」というわけです。

『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』

「語りあう」という言葉は少し強い言葉で、お互いに議論して、

「どうだこうだといういろいろ言い合っているのは何だね」

と。もともとこれは「投げる、投げ合う」という言葉です。

かれら悲しげなる状にて立ち止り、

とにかく、がっかりしている。どうも一人はイエスのヨセフの何か友人ではなかならうかと学者が想像しますが、この「クレオパ」というのが。

¹⁸ その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓



り居て、独り此の頃かしこに起りし事どもを知らぬか』

「エルサレムにいなながら、あなたひとり、この頃起こったあの大事件を知らないとは、一体うかつではありませんか」と。

●如何なる事ぞ

19 イエス言い給う『如何なる事ぞ』

おもしろいですね。

「それはどういうことかね」

と、キリストは半分とぼけたようなことを言った。

答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業に
も言にも能力ある預言者なりしに、²⁰祭司長ら及び我が司らは、死罪に定め
んとて之を付し遂に十字架につけたり。²¹我らはイスラエルを贖うべき者は、
この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日はや三
日めなるが、²²なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝
墓に往きたるに、²³屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは
活き給うと告げたりと言う。²⁴我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、
正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』

そういうわけの分からないことが起きたのだが、一体それはどうしたんだらうというわけ
で、二人でいろいろその事態を議論していたわけですよ。

「イスラエルを贖うべき者」というのはもちろんこれは、「キリストが贖う」という意味で
はない。キリストの贖いの意味ではなくて、いわゆるイスラエル王国を立てて、

「昔のダビデのような、そういったことにする人はこの人だらうと思っていたのに、
十字架にかけられてどうにもならないとは、一体まるで当てはずれだ」

といったようなことです。そして今度は、墓に行ったら、いなくなつてどうのこうのと。
キリストがかつて、

「必ずキリストは受難の後で復活する」

ということを三度までも予告しておられるのに、一向その予告を受けとつていないわけ
です。けれどもとにかく、

「業にも言にも能力ある預言者であつた」

ということは大いに認めている。いや実に預言者どころのさわぎではない。旧約のいかな
る預言者をも桁外れに、イザヤが預言したような素晴らしいことはみなイエスにおいて成
就した。

「預言者の預言を全うした人である」

ということもまだ読めていないわけです。キリストが、



「どんなことだね」

と問われるその意味あいには、ただとぼけていたのではない。

「本当に君たちは、事に合っている、その事が本当に見えていない。言葉を聞いても、その言葉を本当に聞いていない。相変わらずであるな」

というので、キリストにとつては、どうしても次元の相違でどうにもならん。イエスは相変わらず甦ってもなお一人です。十字架にかかる時にも、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

という一人である。甦つてまでも一人である。相変わらず疑われたりなにかしている。それはそうですよ。どんなに不思議なことが起きても、それが読めない。

25 イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。26 キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』

この「べき」も強い。

「死なざるをえないというわけではないか」

と。

「ああ愚かにして使徒たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ」

と。私たちの今のキリスト教界に対しては、「預言者」でなくて、今度は「使徒たち」です。相変わらず今度は、使徒たちの言うことが本当に読めてつかまれないキリスト教界ではないかというわけです。旧約の預言者がつかめない、新約の使徒たちがつかめない。なぜであるか。

●エホバの僕

「此らの苦難を受けて」

という一句において、特にイエスはこれからいろいろ証を語られたことがそのあとに出てくる。私たちは、この預言者たち、預言書を少しく開いてみなくてはならないわけです。イザヤ書42章。

「¹ わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。² かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず。³ また傷める蘆をおることなく、ほのくらき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。⁴ かれは衰えずして喪胆せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。

⁵ 天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物とをひらき、そのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い



給う。⁶云く、われエホバ公義をもてなんじを召したり。われなんじの手をとり汝をまもり、なんじを民の契約とし異邦人のひかりとなし、⁷而して瞽の目を開き俘囚を獄よりいだし、暗きにすめるものを檻のうちより出さしめん。⁸われはエホバなり、是わが名なり。我はわが栄光をほかの者にあたえず、わがほまれを偶像にあたえざるなり。」（イザヤ42・1～8）

「我はヤーヴェーなり。我は有りて在らしむ者なり」

と。この「有りて在らしむ者なり」の神がその、

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり」

と。「僕」とは、この預言者においては、僕はという僕かということ、御霊を宿している。

「我はキリストの僕」

とパウロは言いました。このキリストの僕パウロはどういう人であつたかということ、彼は本当に御霊を宿せる者であつた。

「御霊を宿せる者にあらずば、キリストのものではない」

と言いました。イザヤが、旧約聖書のイザヤ書はその旧約の最高峰です。その啓示は一番深く、また一番高い啓示です。そこで言われていることは何かと思つたら、「エホバの僕」のことであつた。その僕の本質は何かと思つたらば、御霊を与えられている者であつた。はつきりしている。そうして、彼は、ユダヤばかりではない、

「異邦に、全世界に道をたておわらん」

という。

日本人は「道」の民なんです。もういつぺん自覚しなおさなくてはいかん。私は今度、ドイツへ行ったら（1961～1962 西独ハンブルク大学の日本学交換教授）、聖書を貫いている、

「我は道なり」

というこの「道」ということを——ドイツ人はなかなか一面知的ですから、何とかわれてもしようがないが——やろうと思つている。茶道、弓道、柔道、剣道、書道、華道。だから、芸術も本当は「芸道」でなくてはいかん。芸術でなくて。そういう意味では、この「道」です、これみんな。大胆にそういうように告白したらいい。

「道をたておわらん」

という。道は踏む所です。各々の足でもって道を踏むと、それが路となる。道と路とが一如になる。皆さんの足跡はみんな別々ですよ。同じ道を歩いてても、その足跡は、その路は、あなた方が形成していくところの路というものはみんな一人ひとり違う。同じ足跡を決して付けて行きはしない。その道に本当にこの路がピタリと来ているかという、そういう歩き方をするのが本当の道を歩くという。道を路するんだな。そんな日本語はありませんけれども。そういう道を路するような歩き方をして行つたのがこの「エホバの僕」です。



この「エホバの僕」は、

「傷める蘆をおることなく、ほのくらき燈火をけすことなく」という。憐れみの極致です。

●キリストの十字架道

イザヤ書44章に、

「1されどわが僕ヤコブよわが撰みたるイスラエルよ今きけ。

ある個人に向かつて言うかと思えば、今度は選ばれたるヤコブ、イスラエルに向かつて、

2なんじを創造しなんじを胎内につくり又なんじを助くるエホバ如此いいた

もう。わがしもべヤコブよわが撰みたるエシユルンよ

「エシユルン」とは「イスラエル」、

おそるるなかれ。3われ渴けるものに水をそそぎ、乾たる地に流れをそそぎ、

わが霊をなんじの子輩にそそぎ、わが恩恵をなんじの裔にあたうべければな

り。」(イザヤ44・1～3)

御霊は即ち、恩恵である。「御霊」と「恩恵」がまた同義語に使つてある。そういう瑞々しい生命であるというわけです、この御霊は。6節、

「6エホバ、イスラエルの王、イスラエルをあがなうもの、万軍のエホバ如此

いいたもう。われは始なり、われは終なり。われの外に神あることなし。」(イ

ザヤ44・6)

「始めであり終わりである。われの外に神あることなし」

と。原始であり終末であると。

いちいち読んでいきませんが、「エホバの僕」の歌はまだあと、49章1～6節、50章4～9節そして有名な53章と、こうくるわけです。

このような御霊を宿せる僕という者が、これが静かに深い憐れみをもって道を地に、全世界にたておわる。このキリストの道というのは、そこらにできている道とはちがつて、見えないですよ、その道は。ところが、その道を歩いて行くと、その道は素晴らしい自由である。あるときは非常に細い所であつたり、あるときは非常に太かつたり、いろいろでしょうが、断崖を行くような、尾根伝いみたいな所を行く道もあるし、いろいろある。坂道もあれば、下る道もあれば、惨憺たる街道となるかとおもえば、荊棘の道もある。しかし、そこを行くなら、本当に平安と本当の自由がその道にあるという道です。

それでは、その道のいったい性格はどういう性格かと。一言でいえば、十字架道です。十字架道という道。贖いの道です。贖いの法則が働いている道です。そのような贖いの法則が働いている道を天道という。地の道とはちがう。天道を地で行くという。

「御意を天に成るごとく地にも成らせたまえ」



と。天道をこの地でもつて地で行く道が、これがこの十字架道ということになる。地上では十字架道という。何となれば、これは罪の世であるから。現世は罪の世である。カイン、アベルのその昔から殺人の絶えないこの世界です。今もこうやっている瞬間に悲鳴が上がつている。どこかで人が殺されている。

「汝の弟アベルの血がこの地から叫んでいる」

と、あのエホバの言葉は、地から血の叫びが聞こえているこの罪の世です。このどうにもならない、モーセの十誡のどれにも落第。あれは神の道、モーセの十誡は天道です。霊法です。

「律法は霊なるもの」

とパウロが言った。この霊法が踏みにじられて――霊法をその本質において語ったのがイエスの「山上の垂訓」――十誡は山上の垂訓にヒタリです。十誡のまん中に、

「汝の父母を敬え」

とあるね。あの「敬う」という字は、「重んずる」という強い字です。「父母を重んぜよ」と。もはや人間の道すらも今は非常におかしなことになっている。いわゆる民主主義という社会的個としての存在の自由平等というものと、人間の存在の本質とゴチャゴチャになっている。この実存の、父母を敬えないような子というものがあるとするならば、そういう社会も、そういう国家も決して健全なうるわしい信愛の魂の世界とはならない。人間の心というものは、その信愛という要素が深くその血となり肉となっていないかったら、それは人間ではないと私は思う。

●殺人は殺神に極まる

そういうような、

「汝の弟の血が叫んでいる」

といって、これは兄弟殺しで殺人だけれども、ついに神の子キリストを殺した。殺神です。神を殺した。この殺人が実は殺神に極まる。殺神なんて言葉はおそらくないです。けれども、神の子キリストを殺したのは、私たちは神に対して剣を向けた、槍を向けたというような話です。それをもキリストは、

「彼らは為すところを知らず」

と言って、赦した。そんな赦しがあるですか。殉教者の死ではない。宗教的天才が死んだのでもない。天上天下、古今東西にただ一つの死です、キリストの死は。これは贖罪の死という。この贖罪の死がなかったらば、人類に希望はない。

「私がお前たちのために棄てたんだ。完全に引き受けた」

と。「生命には生命を」というが、

「生命を取った者に生命を与える」



そういう交換がいたい世の中にあるか。これが贖いの道という。

「道を地にたておわらん」

とはこのことです。このような音信に、もはや

「キリスト教が分かる、分からない」

と、そんなたわげた話ではない。「分かるの分からないの」と。いくらでも分かってください。いくらでも分からないでください。「分かる、分からない」という、そんなことではない。

「降参するかどうか。キリストの前に平伏すかどうか」

ということ。近代人の魂がキリストの前に平伏すまでは。教会堂の上の十字架を見ているのではない。現にかかっている霊の十字架の前に平伏すかどうか。

この殺神的な、モーセの十誡の第六番目は、実にキリストを十字架にかけることによつて極まったです。

「汝、殺さじ。汝は殺人しない」

という断言命法であつた。この信賴に應えるに不信をもつてした。反逆をもつてした。これがこのキリストの十字架です。この十字架が本当にその不信、反逆をあらわしている。ただ十字架を見て泣いてみたりしても、「女よ、泣くな」とキリストが言われたのはそのことです。だから、キリストは反語的に、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

と、驚くべき反語です。

私はあの『イエスの実存』(Existenz Jesu (株) 南江堂 1958年刊)というドイツ語の教科書の後の方に註を書いておきましたが、あの一文は短いけれども、火の出るような文章です。

そのようなイエスの十字架に担われて、私たちはもはや何をか言わんや。贖いとられてある自分を冥想すれば、

「自分の信仰の、自分の実存の、自分の聖書知識の」

なんてことは一切問題でない。絶対無条件です。絶対無条件にとらえられている恩寵です。十字架の恩寵からもれる者は一人もない。無条件に受ける人は。絶言絶慮というけれども、まさに絶言絶慮の境地です。言葉に絶し思いに絶する。

あなた方は、全存在をもつて、今ここにおいて、この十字架を本当に新しく受けとる。我々は十字架を受けとって、

「これでいい」

という日はない、「これでいい」という所はない。限りなくです。そうすれば必ず、そのあとからまた驚くべきものをキリストは与えてやまない。

キリストの墓の岩盤が神の力によつて震動と共に揺らぎまろんでしまい、そして、ローマの兵隊は驚きあわてて散じてしまい、キリストが十字架において、



「わが神、わが神、なんぞ」

と仰れば——今、外で天雷が轟いたけれども——天地晦冥、雷鳴轟き、雷霆が閃くような、そういったような事態になりました。

● 甦えざるをえない

そういう神の僕は、ついにイザヤ書53章のごとく、

「4まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5彼はわれらの愆とがのために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰こらしめをうけてわれらに平安やすきをあとう。そのうたれし瘡きずによりてわれらは癒されたり。」（イザヤ

53・4～5）

「われらの不義のために碎かれ」

という。私が「碎け」という言葉をつかまえたのはここです。「神の痛み」ではない。キリストの碎けによる。私たちの贖いは完全に担われてしまった。

毎年一回、大祭司が聖所と至聖所の間の幕をくぐって、至聖所に入って行って、小羊の犠牲の儀式をやった。執り成しの祈りをなした。その大祭司の執り成しも、その小羊そのものも、イエス・キリストが自ら完全にこれを成就した。

旧約の宗教はここに完全に廃棄されたんです。廃棄され、同時にその根本精神において満たされてしまった。完全に満たされてしまった。だから、

「至聖所と聖所の間の幕がそのキリストの叫びと共に切って落とされた」

と、おそろしいことが書いてある。

イエスはそのような事態を道すがら語れたわけです。そして、その十字架の担いをして、そして今度は復活・昇天という、いきなり天界へ行くはずだったキリストがこの角度をとらなくてはならなかった。贖罪の大業を成就されましたから、今度は来るものはもう必然に「べき」である。「甦えざるをえない」という、この生ける生命の道。コリント前書15章でパウロが言っているとおり、

「もし、キリストが復活しなかったならば、汝らの信仰は空しい」

と。「汝らの信仰は空しい」どころではない。キリストの十字架が空しくなってしまう。それでは殉教者の死と同じことになってしまう。贖罪するのは、贖罪しっぱなしではない。贖罪だけではない。これを歓喜の生命に救いあげるといのが、罪を贖い、喜びの生命に救いあげる、

「罪のために十字架に渡され、義のために甦える」

という、この義の救いのために神さまはキリストを甦えさせる。



● 枯骨の復活

エゼキエル書37章を開いてください。エゼキエルという預言者が、

「ここにエホバの手我に臨みエホバ我をして霊にて出で行かしめ、非常に祈りの深い境地です。そして、霊で出て行く。」

谷の中に我を置き賜う。

霊視させられて、そういった霊的現実には置かれるわけです。

そこには骨充てり。² 彼その周囲に我をひきめぐりたもうに谷の表には骨はなはだ多くあり皆はなはだ枯れたり。³ 彼われに言いたまいけるは、人の子よこれらの骨は生くるや。我言う、主エホバよ汝知りたもう。⁴ 彼我に言いたもう、これらの骨に預言し之に言うべし、枯れたる骨よエホバの言を聞け。⁵ 主エホバこれらの骨にかく言いたもう、視よ我汝らの中に氣息を入らしめて汝等を生かしめん。⁶ 我筋を汝らの上に作り肉を汝らの上に生ぜしめ皮をもて汝らを蔽い、氣息を汝らの中に与えて汝らを生かしめん。汝ら我がエホバなるを知らん。

この「氣息」という字は、「ルーアツハ」という「靈氣」という字です。時々、「いき」という字は「ネフェシユ」という字も使っておりますけれども、「靈魂」の「魂」の方ですね、「ネフェシユ」という字は。「靈」は「ルーアツハ」、「御靈」と同じ字です。

⁷ 我命ぜられしごとく預言しけるが、我が預言する時に音あり骨うごきて骨と骨あい連なる。⁸ 我見しに筋その上に出できたり肉生じ皮上よりこれを蔽いしが氣息その中にあらず。⁹ 彼また我に言いたまいけるは人の子よ氣息に預言せよ、人の子よ預言して氣息に言え。主エホバかく言いたもう。氣息よ汝四方の風より来たり

この「風」がまた「ルーアツハ」という字です。「息」と同じ字です。

この殺されし者等の上に呼吸してこれを生かしめよ。¹⁰ 我命ぜられしごとく預言せしかば氣息これに入りて皆生きその足にて立ち甚だ多くの群衆となれり。(エゼキエル書37・1～10)

なんという不思議な霊視を受けたことですね。

「マイカンフ」「わが闘争」という映画があります。アウシュビッツにたくさん屋根がうち並んでいる。あそこで大体、ヨーロッパユダヤ人の7割が殺されたという。驚くべきことです。あそこばかりではない。もう少し他もあります。ポーランドにユダヤ人街というのをつくって、そこへユダヤ人をみんな閉じ込めてしまつて、だんだん食糧を減らしていく。その姿がみんな映つてきますけれども。小さい子どもから大人にいたるまで、まるで骸骨に皮をかぶせたような顔している。これがナチス・ドイツのした仕業である。

このエゼキエル書の、



「枯れたる骨がはなはだ多くあり」

という、その通りの光景です。ダンテの地獄篇もこれに及ばないような現実です。私はあの映画を見たあとで、何とも言えない気持ちになった。

●大和の福音の使命

20世紀の文明のこの世の中の、もう終末的な人間の心の様相というものが出ている。日本人は東洋の端の島国でいかにも温和な民です。正直、いろんな人種の顔をみていると、日本人は一番温和な顔していると私は思う。

日本人は西洋の真似はやめて――また全世界の人間には、ある共通の悪いものがある。ああいうような現実を見せつけられるにつけても――それらのものに目覚めて、日本人は本当に新しく、いかに人間は福音が必要かということ、新しく目覚めた人たちが、福音というものがどれだけ大事なものであるかという、もう福音が魂の息吹となるのでなければ、全世界には望みがないということをつくづく思う。クリスチャンがいわゆる聖書研究いじりなんかをしているときではない。本当に、

「ほの暗き灯火を消すことなく、傷める葦を折ることなき」

この福音を身に体して行くのでないならば望みはない。

大和民族は、なぜだかしらんが、「大和」と書く。本当の大和というものは福音の他にない。本当に和をもたらしめるものは福音のほかにならない。

「平和ならしむる者、その人は神の子となえられん」

と。大きな和をもたらしむる者は「神の子」です。そして、その大きな和は、「平和、平和」と唱えることではない。本当の天地の和らぎをもたらしたところのキリストの贖罪の愛が、この贖罪の愛の御霊が我々の存在の霊の血とならなければ。私たちの存在の使命はそのようなどころにあることをつくづく思う。

この神の、キリストに顕れたところの、愛の血は、愛の生命は、これは天地に本当の義をもたらせるものです。イザヤ書60章21節に、

「21 汝の民はことごとく義者となりてとしえに地を嗣が^つん。かれはわが植たる樹株わが手の工わが栄光をあらわす者となるべし。22 その小きものは千となりその弱きものは強国となるべし。われエホバその時いたらば速かにこの事をなさん。」(イザヤ60・21〜22)

私たちこの小きき群れが、小きき民が強きものとなり、この小ききものが千となり、その弱きものは強き民となる。イエス・キリストは羔、「神の羔」といわれる。羔はおよそ弱きものの象徴です。角もなければ力もない。この神の羔が全世界の悪を滅ぼし、罪に打ち勝ち、この羔に宿るところの神の霊の愛は何よりも強い、一切を贖いとるところの力です。ですので、我々は本当の力を持つというならば、この羔の姿に僕の、御霊の僕の、羔の



すがた。「傷める葦を折ることなく、ほの暗き灯火を消すことなき」魂となる。

昔の坊さんたちの実存を見ると、そういう角度の人が本当の坊さんである。いつかもお話したでしょ。親鸞上人が托鉢僧でボロを着て歩いてた。食べるものがないので、

「お芋をひとついただきたい」

「お前みたいな汚い乞食僧になにがやれるか」

と断った。

「ああ、そうですか。ご縁がなければ仕方ありません」

と、ニコニコとそこを立ち去って行けば、あとでそのおやじは芋を食べようとすれば、生芋となっていた。柔和なる弱きものの中にある力がこれを生芋とした。食べられない。即ち、その人の頑なな心がちゃんとそこに現象してくる。

私は京都に行って、日本の仏教の偉大な僧侶たちのことを思った。法然・親鸞の大恩賜がちょうどやっている真つ最中でした。たくさん信徒が来ているわけです。しかし、本当に彼らの仏道が民衆の生活にしみこんでいるかは、私はもちろんそうであるとは思えません。しかし、あの徹した坊さんたちがやはり、ともかくもそれだけの力をもって何十年と何百年と影響を与えている。

●贖いの道

「我は道なり」

と言われた、キリストの道の中に入って、自分自身が道の中に溶け込んでいるような、

「我は生命なり」

と言われた、その生命の中に溶け、

「我は真理なり」

と言われた、その真理の中に身を入れて歩くようなキリスト者でなかったら。だいいち自分で分かるです、そうでなかったら何か偽りであるということが。なにか自分の魂が真の喜びを持っていないということが。魂の世界は、説明でないから、誤魔化しがきかない。どんなに飾っても、どんなに説明しても、どんなに気負ってみたって、これはダメです。魂の世界は絶対に誤魔化しのきかない世界ですから。これを本当に受けとって、生命を本当に持っているか、持っていないか。

そういう、

「²¹汝の民はことごとく義者となりてとこしえに地を嗣が^つん。」

というのは、

「このような贖いの道を行くものが真に義しい」

ということ。普通の「正しい」とはちがう。エホバの道を行く者は義しいという。「義」というのは、申し上げているとおり、「己を捨てている」のが義なんですから。



「神さま、あなたは然り^{しか}。私は、自分に対しては否^{いな}」

というのが義なんだから。これは十字架道です。そうすると、神さまの方は、

「よし。それでよろしい」

と言われる。今度は驚くべき肯定、

「然り、アーメン」

という世界がそこに展開する。それを現実でもってどのようなことであるかを、自分でもって味わい、自分で咀嚼し、自分でそこを血となし肉としていくというわけです。

この「枯骨の復活」のように、骨が並んでいるような惨憺たる事態。このユダヤ人たちの血が叫んでいる。神さまの審判は厳かですから、それだけのことをすれば、それだけのことは来るです、そのあとに。どういう事態が来るかは私は知らん。

「目には目を、歯には歯を、命には命を」

というこの法則は働く。しかし、それを本当に悔改めて、キリストの十字架の前に、生命には生命をもつて与えてくださった十字架の前に平伏すときに、今度はその人たちをして使命を負わせる。パウロがそうでした。わが名のために多くの苦しみを受けて、そして、パウロに栄冠を与えようというのが、これはこのパウロという人物に展開してきたところの、キリストによるところの法則、道であった。

●再臨節

「罪・死・陰府・サタン」、こういう四つの四位一体みたいな連関の世界に対してキリストは十字架と復活をもつて完全にこれを滅ぼしてしまったのです。不当な迫害を受け、不当な死を受けたところの人たちは、このキリストの執り成しによって必ずその生命を戻される。再臨の日に、神さまの来たるべき日に。

だから、私は再臨節というものはその意味において絶対に忘れてはならない、設けずばいられないところのものであると思う。この再臨のときの新天地の終末の希望がもしないならば、キリストの甦りもまた徒^{いたずら}であると言つても過言でなくらいです。イエスの甦られて今もなお生きたもうとは、どのような権威をもつて、この生ける神の右に坐したもうところのキリストが、審判と恩恵の日を待つておられるか。一切の地上の歴史の総決算のくるとき。それは再臨節という節がなくても、私たちはこの再臨節というのを、ペンテコステの次は再臨節というものを、真夏のもの凄^{すご}い輝かしい日にでもやったらいい。

そういう、再臨の終末の希望なくして、この惨憺たる現実、不合理な現実をいかんせん。戦争また戦争の血なまぐさい人類の歴史の現実をいかんせん。義しき者が本当に神を立て、キリストの前に本当に魂が降参した者。このキリストの復活の生命を受け継ぐ者。またその全世界の人々が本当に一人残らず救いにあずからんとて執り成すところの聖霊の祈り。これに關与するところのクリスチャン。



「責める者のために祈れ」

というような、そういう祈りはこの御霊を宿せる神の僕でなければできない。

何々主義の、何々教会のなんて言っている人はダメです。なんにもみんな十把一絡げに、いわゆる「エキュメニカルチャーチ」という、「世界教会」なんてものを立てる必要はない。みな点々な在り方で結構です。おおいに点々な在り方でよい。しかし、その点々な在り方を貫いているところのもの。その特殊性において貫いているところの普遍なるものは何か。御霊です。

花はどれも本当の花です。どんな花でもみんなこれは本当の花です。その花を貫いているところの太陽の光。その太陽の光が七色に反映して花咲いているところの、その光、そのキリストの光。御霊の光です。その御霊の光をキリスト者が持たないで、何のキリスト者か。たわごとである。無教会主義は、無教会主義を乗り越えるときに初めてその本当の無教会ということが言える。しかし、もうそれを言う必要はないです、なんにも。

私は「幕屋」ということを言い始めた人ですが、しかし、幕屋というのも、他のある群れの方々が幕屋というのを大いに使ってらっしゃるので、それと混同されては私たちのいような公の秩序が乱れるから――私たちの使命は大事です――大事な使命を誤解もされるし、またそういうことは福音のためによろしくないから、私は幕屋という看板を下ろした。下ろしたけれども、幕屋という本質は決して下ろしはしませんよ。

「原始福音」という言葉も私はなるべく使わないことにした。「キリストの福音」とパウロが言った、この「キリストの福音」でよい。よろしいでなくて、大いに結構です。とにかく、それぞれの在り方をただ固執するのではない。私は、ただ私に委ねられたところをもつて貫く。そして、皆さんと一緒にそれを貫く。それぞれの使命を貫いて、偉大なるキリストの体の一端を担おうというわけです。どれもこれもとにかく本ものでなくてはいかん。うそのものや、自分の主義主張や、自分の教会とか、そのようなことでは、本当に「聖名の栄光を」ということではない。

●イエス見えずなり給う

そういうわけで、このキリストは、

²⁷かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。

という。だから、復活のキリストは話はずきない。

²⁸遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、

イエスは、その二人と話しているのうが楽しくて、なお進みゆくさまなれば、

²⁹強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』

そういう、エマオ途上のキリストということ。



乃^{すなわ}ち留らんとて入りたもう。30 共に食事の席に著^つきたもう時、パンを取りて祝^さし、擘^さきて与え給えば、31 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずなり給う。

「留れ」というのは、「宿る」「メノー」という字です。

「どうぞ、お宿りください」

と。キリストを宿すんですよ。キリストと一緒にご飯を食べて、

「まあ一晩ここで泊まっていてくださいよ」

と。

「朋^{とも}あり遠方より来る、また楽しからずや」(論語学而編)

という。キリストに、

「まあひとつお泊まりください」

と。ザアカイにはキリストの方から、

「我、今日、汝の家に行つて宿らん」

と。ザアカイはおつたまげてしまつて、自分の要求以上のことを言われたので、もううれしくてたまらない。

イエスというひとは非常に、復活しているキリストも、非常に人情豊かなるキリストです。

「私は先に行く」なんて言わない。「そうか、それではまあひとつ宿ろう」と。

パンを取りて祝し、擘^さきて与え給えば、

最後の晩餐と同じようなことをなさつたので、その旅人のなさり方を見て——誰だか分からない。なにかえらく預言者のことや旧約聖書のことにも明る人だなということとは分かつて、彼らの心は少し燃えていたけれども、キリストとは分からない——パンを裂く様子を見て、かつてそれを見たことがあるんです。

31 彼らの目開けてイエスなるを認む、

そこで二人は開眼をした。それは一応ですよ、一応、開眼した。ハッと思つた。

「冗談じゃない、これは十字架にかかつたあのイエスではないか」

と。これが生きて自分たちと語つて来たというので、まあ驚天動地の事態に目が開けた。

而してイエス見えずなり給う。

ところが、その瞬間に見えなくなつてしまつた。何ですか、これは。

彼らの胸の中に、彼らの心の中にキリストは入つた。キリストは姿を消してどこかへ行つてしまつたのではない。彼らの中に、開眼した彼らの中に入つた。パウロが目より鱗の如きものが落ちた時に、彼の中に御霊が臨んだように。このキリストは姿を消して、御霊のキリストとなつて、この二人の中に一応とにかく入つてくださった。一応。

宿らんとしたところのキリストの気持は、とうとう——お宿に宿つたのではなかった——彼らの心、体の中にキリストは宿つてしまつた。けれども、彼らの体の中に復活のキリ



ストが御霊をもって宿ったことを彼らはまだ知らない。どこまでもキリストは隠れている。いずこへ行つたかといつて探したつて、それはしょうがない。

もちろん、キリストという霊的存在は自由自在ですよ、顕れることは。けれども、そのキリストは、

「御霊のキリストは、そこに分霊して彼らの中に入った。キリストが宿ろうというキリストの本願は、悲願はそこにあった」

と、私は見ます。見えなくなつたのがいい。霊的現象を見ているのではない。根源現実で彼らの中に入つてきて、

「お前たちの中に入った私が見えるか」と、今度は言う。

「彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずなり給う。」

という、この一言に私はこのたび初めてそれに気が付いた。そんなことは誰も書いてませんよ。

●イエスその中に立ち

32 かれら互に言う『^{みち}途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』

心がうちに燃えた。

「あの人が語っていると、何かしらんけれども自分たちの魂にビリビリ響くものが出てき、何かしらんけれども熱くなつてきた」

という。

33 かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、34 『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』35 二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。36 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』^{おそ}と言ひ給う。37 かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思ひしに、

また「ブニューマ」、変化のもの、幽霊かと思つた。

38 イエス言ひ給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑^{うたがい}おこるか、39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫^なでて見よ、霊には肉と骨となし、我に^{あり}はあり、汝らの見るごとし』

「私が与えようとしている復活の、この霊体というものはこのようなものである」という、たった一遍そのことを証しなされた。パウロがコリント前書15章で、

「血気の体あり、霊の体あり」

という、あの霊体の事態をキリストがここでもつて証されたわけです。これは私たちの想



像を絶する。

「永遠の生命」は言葉ではない。キリストが「生きる」という、具体的に「生きる」とは、私たちの今、現にたまわっているこの肉体、この人間というこの構造は実に素晴らしいものです。何ともこんな不思議なものはないです、他には。世界中で一番不思議なものは、人間というひとつの存在。宇宙でこの不思議なもの。

この人間というやつが実に不可解なる存在です。これはまた実にけしからん存在でもある。これを完全に、そのけしからん面をすっかり贖いとして、そして、本来の神の本願の姿にしようという。それは今、我々が賜っているこんな肉体よりもつと素晴らしい、霊体的実在というものに神さまは完成仕上げようという、再臨の日に向かっていく。

その徴をここにキリストは、復活のキリストは、

「私の復活は、

そこらでちよつと出てきますよね、死んだ人が。ああいうのとは違う。

私の出方は、ああいう出てきたのとは違う」

と。それは、キリストは質が違うんだから。ちよつと幽霊が出てくるはなしがあるが、あれはみな本当だと私は思いますが。けれども、キリストの出方はそれとはまるでその質が違ふ。

●平安なんじらに在れ

³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、『平安なんじらに在れ』と言
い給う。

と。

「我々の魂は汝のうちに安らうまでは安きを得ない」

という。「汝のうちに安らうまでは」とは、

「汝の懐のうちに安らうまでは」

ということ。観念的に安らったってダメですよ。神さまの懐に、父の懐に安らっていたのはキリストです。羊飼いに抱かれていた小羊のごとく、神の懐に安らっていたのはキリストです。それが本当の安らいということ。

私たちがこのキリストの中に、生命のキリストの中に、甦って今もなお生きたもうこのキリストの中に、全存在を安らうまでは安きを得ない。私たちがこうやってあるのは、キリストの御腕に引かれ、抱かれ、包まれてある。その安らい。これは同じ共通なるものが来るまではダメなんです。

キリストの御霊が、わがうちにそのように宿る。御霊が宿る。

「エマオの途上で、私は今日行つて泊まろう」

と。部屋に泊まるのではなかった。



「エマオの二人の中に私は宿るよ」

と。その時に初めてその存在は安らいとなる。それは本当の平安です。

皆さん、そうでしょ。本当に十字架の贖いを受けとって、復活の生命を、十字架の下で本当に御霊のバプテスマを受けた。その時から本当の安らいが来たでしょ。私は正直、告白します。それまでのいわゆる無教会主義信仰では、私には本当の安らいはなかった。

御霊のバプテスマを受けた時から本当の安らいが来たから、何人来ようが、どれほどのいわゆる敵がありましようが、逆にこの小さき者が小羊の担いができるわけです。空元気でも何でもない。キリスト者というならば、そこに来ないで、アクセサリー信仰ではどうにもならん。皆さんの存在の使命はこの原始核を宿して、

「キリストの御霊という原始核を宿することによって、真の原始力的存在となる」

と申し上げているとおりです。わがうちに「原始力」「ウル・クラフト」あり。本当の力がある。わが力にあらず、主の力である。主のみ力です。主の平安です。愛であり、光であり、生命である。何でもござれ。その中はどう説明できない。

ときどき、いろんな意地の悪いことにでつくわします。ああ結構です。昔の坊さんよりもつと楽な心境に入れる。そうでしょ。それは御霊がなければダメですよ。「自分の信仰」なんていつて頑張っていたら。ただパリサイになってこわばるばかりです。

この十字架を本当に受けとっていないくて、ただいわゆる霊的というようなことで、熱っぽいようなことをやっていると、霊的傲慢というやつになって、集会のあとで飲めや騒げやなんて妙なことになる人もあるそうです。とんでもない。それは絶対に、十字架の贖いというところが問題なんです。自分が浮いたらダメになるに決まっているんだから。もう魂の世界は誤魔化しがきかないから。そういうわけですよ。

● 十字架における御霊のバプテスマ

それが申し上げているとおり、

「なんぞ、我を善きというか」

というキリストの魂です。

「なんぞ、我を善きというか。善きものは神のほかになし」

という、この砕け、この無的実存です。

「さいわいなるかな、霊の貧しき者」

とは、そのような姿。

「天国、神、キリストは汝のうちにあり」

というのがそのことです。このキリストの甦りの復活のキリストは、私たちにとってちゃんと貫いている。もう、クリスマスを迎えようが、復活節を迎えようが、聖霊降臨を迎えようが、再臨節を迎えようが、これはちゃんと一貫しているんです。しょっちゅう、一貫



している。それらの話の中にこれが全部入ってくる。自然に。自然に入らざるを得ない。渾然たる一体です。だから、

「御国を来らせたまえ」

という。

あのパウロが、わが熱心においてキリストを迫害していたサウロが、神の熱心、キリストの熱心が入ってきたときに、完全にひっくり返った。いわゆる律法に忠実なるユダヤ人が、なぜ、律法を真に生かしたこのキリストに、パウロと一緒にひっくり返ってくれないか。

地上で流されたあらゆる不当なる血は、必ず血の復讐は、神さまらしい復讐をなさるから、畏ろしい法則がはたらく。神のキリストにおける贖いと、贖いをもなお受けず昂然としていれば、審判は来らざるを得ない。神の世界は義の住む世界である。神の世界は義の貫いているところの真の愛の世界です。そういうわけです。

エマオ途上のキリストを、この二人はなお御霊において本当に受けることができなかったのは仕方がない。ペンテコステをまだ迎えていない。

なにもあのペンテコステでなくたって、個人でもってペンテコステを迎えていた人もあるでしょう、歴史に現れていないだけで。

とにかく、この十字架が本当に受けとられて、そこにおける祈りの世界で聖霊のバプテスマを受けるまでは。はつきりしている。その線はどうしても、私たちは、その内実は限りなく深められて、また限りなく自由自在に展開していくという、この肝心要は、十字架における御霊のバプテスマです。そして、そこにこそ神の国の本当の来臨を臨む真の希望は、わがうちに天国が来ているから、求められ、祈られ、どんな事態に入っても決して屈することなく、皆さんは行き詰まりをしらない前進のクリスチャンとして、神の国を来らしめるクリスチャンとして進んで行く。このイエスの、キリストの生命がなくて、何のことか。その生命は即ち、神の国といい、永遠の生命といい、その中核は御霊にある。終わります。

